大阪市立大学生活科学部紀要・第47巻（1999）

エコロジカル・パースペクティブと「状況の中の人」

——ソーシャルワークの固有性の検討——

河野真寿美・岩間伸之

A Study on "Person in the Situation" in Ecological Perspective:

Target System for Social Work Practice

MASUMI KAWANO AND NOBUYUKI IWAMA

1．はじめに

本稿は、ソーシャルワークにおける重要概念である「状況の中の人」(person in the situation)について、エコロジカル・パースペクティブ(ecological perspective；生態学的視座)から考察することによってソーシャルワークがもつ対象把握の特質を明らかにすることを目的とする。ソーシャルワークにおける対象把握の特質について論考を深めることは、必然的にソーシャルワークがもつ固有の焦点や固有の機能について明らかにすることにつながる。

近年の介護保険制度の導入をはじめとする新たな福祉をめぐる動向は、ソーシャルワークの専門性を根本から問うことを否応なしに迫るものである。それは、保健・医療・福祉の連携が実質的な面で求められることになったこととも無関係ではない。ソーシャルワークには何ができるのか。また、ソーシャルワーク固有の専門性とは何か。こうした問いに、他の隣接領域に向けた明確な説明概念を持たなければない。そのための一つの取り組みとして、従来からソーシャルワークの対象把握の概念として重視されてきた「状況の中の人」の概念を生態学的視座から検討し、ソーシャルワークの固有性の明確化に寄与したい。

本稿では、まず「状況（環境）の中の人」をめぐる主要論者たちによる位置づけ及び見解を明らかにした上で、ジャーメイン(Carel B.Germain)らによるライフモデル(Life Model)の概念枠組みから「状況の中の人」について考察することにしたい。さらに、今日の状況を鑑み、「状況の中の人」をめぐる今日的課題について言及する。

2．ソーシャルワークの発展と「状況の中の人」の概念　－個人と社会との関係－

ソーシャルワークにおける対象把握の問題は、ソーシャルワークの本質に関わる極めて重要なテーマである。社会・経済状況の変化に影響を受けながら、ソーシャルワークが向ける焦点は、個人と社会の間を「振り子」のごとく揺れてきた。しかし、個人と社会のつながりを示す「状況の中の人」という古典的な概念は、モデル乱立の混乱を経た後、システム理論及び生態学の助けを得て息を吹き返し、個人と社会を一体として捉える視座を提供した。今や、「個人か社会か」ではなく「個人も社会も」という捉え方は、ソーシャルワークに深く根づいている。エコロジカル・ソーシャルワークにおいて強調される、個人と社会の接触面への介入とシステムの力動を変化させるという見地は、現代ソーシャルワークにおいて不可欠な要素となっている。

「状況の中の人」という概念が、ソーシャルワーク（ケースワーク）の理論的発展に大きな影響を与えてきた論者たちによってどのように認識されてきたのかについて簡単にまとめておく。ここでは、リッチモンド(Mary E.Richmond,1861-1928)、ハミルトン(Gordon Hamilton,1892-1967)、パールマン(Helen H.Perlman, 1905-)、ホリス(Florence Hollis,1907-1987)の4人の見解を概観する。

リッチモンドは1917年に『社会診断』を、1922年には『ソーシャル・ケースワークとは何か』を著し、ケースワークの基本的枠組みと視点を明示し、科学的体系化をもたらした。リッチモンドはケースワークに医学のモデルを採り入れることにより、専門職としての体系化を図った。彼女の所論は、クライエントめぐる社会環境的条件の探究と、問題の原因究明に必要な資料の収集、とくにクライエントの社会的状況、他者との人間関係、社会制度や文化との関係などに重点が置かれ、ケースワーク

の焦点は個人と環境との社会関係の調整にあるものとして捉えられるようになった[1]。彼女は、ケースワークを「人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている」[2]と定義し、ソーシャルワーカーの活動領域はクライエントの社会関係というあらゆる線をたどって外へ外へと放射状に広がっていくと述べている[3]。彼女はまた、「パーソナリティの発達という目的は、教育、精神医学等、多くの他の形態のサービスと共有するものである」[4]と指摘しながらもソーシャル・ケースワークの独自性をその焦点づけ、つまり「状況の中の人」に見出していた。彼女の研究はケースワークの基礎を確立したのと同時に、「状況の中の人」の重要性を初めて論理的に示すものであったといえる。

ハミルトンは、人間を「生物社会的な有機体」と捉え、ソーシャルワークにおける問題は「一種の心理社会的過程である」[5]と述べ、各のケースは内的要素と外的要素、人と状況から成り立つと考えた[6]。彼女は「私自身の観点は『診断的な』(diagnostic)接近法にもとづいている」[7]と明言するように、理論の根拠を本質的には精神分析に求めているが、「ソーシャルワークは常に心理社会的事象の概念と照応するものであるが、人間をその日常生活の中で援助するというソーシャルワークの伝統的役割に合致した、新しい見通しと治療の機会を絶えず見出している」[8]と述べ、評価と処遇を重要視しながら、ケースワークの領域とその特有の方法を明らかにしようと努めた。彼女の研究は後にパールマンやホリスにも影響を与えたが、「人と状況の全体性」の一部に変化が起これば それに連動する形で他の部分も変わってくるという考え方は、今日のシステム理論にも通ずるものである。

パールマンは、ケースワークを「個々人が社会的に行動するあいだに起こる問題をよりよく解決することを助けるために福祉機関によって用いられる過程」[9]と定義し、人(person)、場所(place)、問題(problem)、過程(process)の「4つのP」を中心にケースワーク論を試みた。福祉機関という「場」について言及している点に機能主義学派の特徴がうかがえるように、パールマンは診断主義学派と機能主義学派の理論を折衷したことで知られている。パールマンはケースワーク過程のあり方に強い関心を向け、ケースワークの過程を人間の生活状況に動きと変化を与えるものとし[10]、そのなかでも「人」については、個別な「人」として認識することの重要性を説くことで「状況の中の人」というソーシャルワーク独自の視座に迫っている。パーソナリティ理論を用いてクライエントとその家族を分析しているが、単なるパーソナリティではなくハミルトンも強調した「社会状況と相互交流の把握」である[11]。パールマンのいう「状況の中の人」は、その後のケースワーク理論の体系に多大な影響を与えた。

ホリスは、ケースワークの中心概念を「人、状況、両者の相互作用」の3つの相互関連性からなる「状況の中の人」として位置づけた[12]。そして、その相互作用が極めて複雑なものであり、「人」と「環境」との関係は単なる作用と反作用の因果関係によるものではないと指摘する[13]。彼女は、個人のよりよき社会機能の遂行を指向するというケースワークの目的は単にケースワークのみが有する独自のものではなく、精神医学もまた社会的機能を向上させることを目的としているとして[14]、両者の相違をその技術的方法の差ととらえている。パーソナリティ診断の知見を力動精神医学から取り入れた独自の技法分類はケースワークの発展に大きく貢献した。彼女は、概念化の手法として医学モデルを導入しており[15]、そのアプローチは診断主義学派の流れを汲むものとして位置づけられている。したがって、彼女の理論は治療の域を脱することはできなかったといえるが[16]、「状況の中の人」という視点の重要性を明確に指摘するものである。

以上のように、ケースワークの主要論者たちは、各々の時代性によってその主張の論点に微妙な違いこそあれ、いずれも科学的体系化をめざし、長年に渡って人と環境の両方を視野に入れた対象把握のあり方を模索してきた。4人の所説は、独自の理論展開をしているものの、「状況の中の人」という概念に着目している点は共通しており、ソーシャルワークの歴史的発展において、「人」か「環境」かという二者択一的な対象把握の議論に多大な影響を与えたことは明らかである。

3．ライフモデルにおける4つの基本的枠組み ―エコロジカル・パースペクティブ―

ライフモデルは、生態学を背景理論としたエコロジカル・ソーシャルワーク(ecological social work)の代表格として位置づけられる。1980年にジャーメイン(Carel B.Germain)は、ギッターマン(Alex Gitterman)とともに*The Life Model of Social Work Practice*[17]を出版し、ライフモデルを体系化した。さらに1996年には、彼女らは本書の内容に、広がりと深さを加えた第2版[18]を出版した。

生態学は、生態系における動植物と環境との関係(交互作用／交換作用)に焦点を当てた学問体系である。「状況の中の人」を主要な概念とするソーシャルワーク

において、この生態学の考え方は大きなインパクトをもつものであった。ジャーメインは、「生態学は有機体と環境との相互依存を強調しているので、とりわけ状況の中の人の概念に歴史的に深く関わり合いのあったソーシャルワークのメタファーとしてふさわしい」[19]と指摘している。ライフモデルは、この「交互作用（交換作用）」という視点から、広範な諸領域における理論や概念を統合し、再概念化したソーシャルワークモデルである。

The Life Model of Social Work Practice(第2版)は、3部構成になっている。第1部は生態学的視座とソーシャルワーク実践におけるライフモデルの概観、第2部ではライフモデル実践における援助過程、第3部ではコミュニティ、組織、行政レベルでのライフモデル実践について述べられている。そのうち第1部の冒頭部分では、エコロジカル・パースペクティブによるキーコンセプトについて、4つの概念枠組みの表を用いて説明されている。これらの内容は、「状況の中の人」の概念を深めるための前提となるものであり、エコロジカル・パースペクティブの理解に極めて有効である。

以下、4つの枠組みを用いながら、ライフモデルにおけるエコロジカル・パースペクティブの概要について整理する。

1）人と環境を捉える基本概念（表1）

ライフモデルの理論と実践の前提になるのは、「人と環境」の捉え方である。その捉え方とは、「人と環境の適合(person-environment fit)」という視点である。生態学では、有機体と環境は、お互いに影響を与え合い、相手あるいは自身を変化させるという関係性の中で存在すると考える。その結果、有機体と環境はそれぞれがもう一方を形づくることになる。つまり、エコロジカル・パースペクティブにおいては、人は「人の環境のすべての要素とたえず交換(exchanges)しあう存在」[20]であり、「交互作用（交換作用）を通して生活を営む存在」[21]である。人と環境はこの交互作用を通して適合(fit)している。したがって、人と環境は切り離すことはできない。そしてこの「適合」は必ずしも人にとって好ましいものであるばかりではない。その時点での適合のあり方が人にとって好ましいとき、それは人の成長や安寧を支える「適応状態(adaptedness)」にあるといえるが、その適合のあり方がダメージをもたらすこともある(poor fit)。人と環境は常に変化し続けており、適合のあり方もその時々で変化する。この変化に対応するために、人は適合のあり方を適応状態へ向かう(adaptive)ものへと変化させていく。この行動過程が「適応(adaptation)」であり、人が生きていくための行為はすべて「適応」への試みといえる[22]。つまり、人は適応状態を目指して自身または環境に対して働きかけていく。人が生活するということは自身を取り囲むあらゆるもの（環境）との間で適応し続ける行為と言い換えることができる。したがって、適応とは積極的かつ行動的努力を意味するのである。

しかしながら、その一方で「適応」という言葉が誤解を生んできたことも看過できない。「適応」という言葉が人の積極的かつ行動的努力だけを強調するような概念として用いられ、「環境側の変化」という視点を失ってしまうとき、「適応」はライフモデルが本来的に意味するものと違った概念として捉えられてしまう。これは、「適応は体制順応的保守的要素が内在するとみなされる場合がある」[23]との指摘がある通りである。そしてこの誤った「適応」概念に依ることは、クライエントに過酷な適応努力を強いたり、環境側に人をはめ込むという危険性がある[24]。「適応」はライフモデルの概念の中でも核になる概念であり、その根底に存在するのはあくまでも「人と環境の適合（person-environment fit)」であり、人と環境の両者が一体となって常に変化し続けている。その関係性の中で起こる「適応」であることを認識しなければならないし、「人」と「環境」のそれぞれについて考察する際にもこの前提に基づくことが重要である。

表1　人と環境を捉える基本概念

交換作用 Exchanges	人と環境の間の継続的な交互作用。人と環境はそれぞれが常にもう一方を形づくる。
人と環境の適合 Person-Environment Fit	人のニーズ、能力、行動様式、目標と環境の特質との間の好ましい、あるいは好ましくない適合。
適応状態 Adaptedness	人と環境の間の好ましい適合状態。人の成長と安寧を支え、環境を保護し、豊かにする。
適応 Adaptation	人と環境の適合のレベルを高めるために、自己の変革、環境の変革、あるいはその両方を達成するために計画された行動。
適応的 Adaptive	適応状態に向けた人の潜在能力を引出し、支える人と環境の交換作用。

出所：Carel B. Germain and Alex Gitterman, *The Life Model of Social Work Practice*(2nd ed.), Columbia University Press, 1996, p. 9.(訳は筆者による)

2）「問題」を捉える概念（表2）

「問題」について検討するにあたり、ジャーメインはまず「問題」という単語自体に注目した。本書（第2版）の前書きにおいて彼女は、problemが「欠陥」という意味あいを含む単語であることを指摘し、これまで彼女自身が使ってきたproblem in living(生活問題)という表現を今後は使わないと述べている[25]。彼女はその代わりに、life stressor(生活ストレス源)−stress(ストレス)−coping(対処)という一連の枠組みの中でその事象を捉

えることが生態学的視座に基づく「問題」把握であると考えた。

life stressor(生活ストレス源)とstress(ストレス)は「人－環境」の関係性がもたらすネガティブな状態に関する概念である。life stressorは、例えば疾病や失業、死といった「害」や「欠如」という形（現在は起きていなくとも将来的にそうなるかもしれないという恐れも含む）で人に肉体的、精神的な影響を与える。このlife stressorによってもたらされた影響がstressである。

それでは、人が「問題」と出会うというのはどのようなことなのだろうか。人は何らかの事態にぶつかると、まず意識的にせよ無意識的にせよ、第一次評価（primary appraisal)を行う。この状態が自身にとってlife stressorとなり、ストレスを引き起こすものなのか、なんとか対処(coping)できそうな試練(challenge)なのかという判断である。そしてこの判断基準は各人で違っている。この違いについては、後述するが、「人」についての概念が大きく関係していると思われる。その人のこれまでの経験や性格、物理的な環境、その時点の状況など様々な要素が関わっている。この第一次評価によりその事態がlife stressorと判断されれば第二次評価（secondary appraisal)が行われる。ここで人はそのようなlife stressorに対してどのような手段、資源を使って対処しようかという判断がなされ、その判断に基づいた対処を行う。しかし、このような対処への努力が有効に作用しなければそのことによる精神的なストレスは強くなるだろうし、またそのような状態が肉体的、精神的、社会的な機能不全を招く恐れもある。したがって、ひとつのストレスは他のストレスを引き起こすこともある。また、そういったストレスそのものが機能不全を招くのではない。その人自身の傷つきやすさや、その人が効果的な対処ができたのかどうかということも機能不全の要因となる。つまり、今起こっている事態というのはlife stressor-stressの単なる二者間の直線的因果関係で成り立っているものではなく、複数のlife stressor-stress-copingが絡み合い、さらにそこには時間や空間を含めた環境という多くの要素が関与している。問題とは、それらの総体といえよう。

以上のように生態学的視座に基づくことにより「問題」の複雑な構造が明らかにされ、また、「問題の主体はその人自身である」という個別的性格が容易に理解されることになる。

表２　問題を捉える概念

生活ストレス源 Life stressor	人と環境の適合のレベルや比較的適応している状態を乱す人生の変遷、出来事、問題。
ストレス Stress	対処するためにもつ個人的、環境的資源をこえた生活ストレス源の結果引き起こされる内的（身体的・情緒的）反応。
第１次評価 Primary appraisal	問題が無関係なのか、良いことなのか、ストレス源であるのかを判断する意識的ないし無意識的過程。ストレス源であると判断された場合には、不利益や喪失（すでに受けたダメージ）、生活問題が予想される不利益や喪失というこれからの不安、乗り越えられる課題なのかを判断する。ストレス源は、否定的な感情に関係し、一方、課題は肯定的な感情に関係している。
第２次評価 Secondary appraisal	生活ストレス源に対処するための方法と資源の検討。
対処 Coping	否定的感情をうまく処理するために、自分自身、環境、人と環境の交換作用、あるいは３つすべての局面を変え行動的かつ認知的方法。
フィードバック Feedback	対処努力の効果について認知及び知覚からと環境からの正誤の内的、外的信号及び合図。

出所：Carel B. Germain and Alex Gitterman, *The Life Model of Social Work Practice*(2nd ed.), Columbia University Press, 1996, p. 14.(訳は筆者による)

３）「問題」解決に関わる「人」の概念（表３）

前述したように「問題」について検討する上では、「人」についての概念は極めて重要となる。「問題」との出会い、その対処方法は「人」に依っている。ジャーメインはここで、関係性（relatedness)、対処能力(competence)、自己評価（self-esteem)、自己指南(selfdirection)の４つを問題解決に関わる「人」の重要な概念としてとりあげている。これらは「人－環境」の適合のあり方が肯定的（ポジティブ）な状態であるときに人が獲得するものと考えられている。つまり、これらを獲得することが人が問題解決に立ち向かうか否かを左右する。そこには「本来、人間はこのような４つの属性を備えうる」という前提が必要であり、まさにライフモデルにおける人間観が表れている。

４つの属性はそれぞれが独立しているものではなく、他の属性の発展に重要な意味をもち、依存し合っているという。中でもその中心的概念は関係性である。この関係性の概念は、ボウルビィ(J.M.Bowlby)の「人間は生存のために本来遺伝的に関係を結んでいく能力を備えている」という考えに基づいている。ライフモデルでは、そういった関係性という概念が存在することそのものの重要性に焦点を当てている。人は生まれたときから関係性の中で生活を営んでいる。人が自身の環境と関係性を結んでいくことが生活そのものであるといえる。

「対処能力」はホワイト(White)によって発展させられた概念である。「人」は「問題」に出会うと「人－環境」の適応状態を目指して対処を行う。そしてその対処がうまくいくということはそれが効果的(efficacy)だったと感じる経験をすることである。この経験はその後、人が再び「問題」に出会ったときの解決への力となる。したがって「対処能力」とはその「人」の経験の積み重ねであり、また、その「人」のもつ「問題解決能力」と

もいえる。

一方、「対処能力」は単なる経験の積み重ねではない。人が自己に対して抱く「自己概念（self-concept）」とも深く関わっている。自己概念の中でもライフモデルで重要視されるのが「自己評価（self-esteem）」と「自己指南（self-direction）」である。これらは人の思考や行動に多大な影響を与えると考えられる。人が自分自身をどの程度能力があるか、価値があると感じているのか、またどの程度自身の生活についてコントロールする感性を持ち、行動に責任を持っているのかを自覚することである。このような自己概念はその「問題」が自身の「対処能力」で解決できるか否かを判断する重要な指標の役割を果たす。したがって「問題解決」を考える上では欠かせない視点なのである。つまりライフモデルでは「人」は「問題解決」していく力を備えうると考えており、その力を重視する。

しかし、人の力の重視は思わぬ危険性を持ち合わせる。今日の社会は様々な差別が存在し、この社会構造自体が「問題」を生んでいる、いわば社会という環境が構造的に汚染された状態である。この中で、人の「問題解決力」という視点は社会の構造的汚染を無視するものになりはしないか、環境側の諸問題を引き起こす力に関しての更なる考察が必要ではないかという指摘がある[26]。この指摘は極めて重要である。なぜならライフモデルの本来の目的、人か環境かという二者択一的な焦点づけを克服するという目的に矛盾するからである。したがって、社会構造が持ち合わせている大きな力に関しては十分な認識が必要であり、「人－環境」の二重の焦点づけが形式主義に陥ることを防がなければならないだろう。ジャーメインは第2版では新たに以下の概念を付加しており、特に第一番目の枠組みはこの指摘に関する回答となる。

表3　問題解決に関わる人の概念

関係性 Relatedness	親子の愛着関係をつくり、後に友人関係をつくり、社会参加するための幼児期から本来的に備わっている能力。大人になれば、その愛着関係は性的な関係を含む可能性がある。
効果性 Efficacy	環境に影響を与えるという肯定的な経験から生じる感情の状態。
対処能力 Competence	積み重ねられた効果性の経験から生じた内的な感性。時には、援助を求めたり、援助を受け入れる能力と関係する。
自己概念 Self-concept	自分自身についての考えと感情の全体。
自己評価 Self-esteem	自分の能力、存在意義、尊敬と愛情に値するかについての程度。
自己指南 Self-direction	自分の生活についてコントロールする感性と他者の権利とニーズを尊重しながら、自分の決定や行動に責任をもつ能力。

出所：Carel B. Germain and Alex Gitterman, *The Life Model of Social Work Practice*(2nd ed.), Columbia University Press, 1996, p. 18.（訳は筆者による）

4）ライフモデルの新たな概念（表4）

ジャーメインが第2版を著す動機となったのは、初版の出版から経過した15年間の社会の劇的な変化であり、その変化に応えるため、第2版で新たに加わったより深く発展させた概念が表4の内容である。ジャーメインはこの中で、第1に不適切な社会的プロセス、またはコミュニティプロセスに関する概念、第2にハビタット(habitat)、ニッチ(niche)の概念、第3にライフコースの概念という3つの枠組みについて述べている。以下順を追って整理する。

第1には、不適切な社会的プロセス、またはコミュニティプロセスに関する概念（power,powerlessness,pollution）についてである。ジャーメインは、1980年代におこった力（主に経済力）の乱用について、これまでにはない深刻なものと受けとめ、この力の乱用によって多くの人々が排除、抑圧を受けていると指摘する[27]。支配的な集団は人種や民族、年齢、性別、身体的状況等のあらゆる特徴を理由として「攻撃されやすい」集団を抑圧している。そして、力の乱用の結果生まれたのが、さまざまな差別を生みだし、温存する社会である。また、生態系というより広い視点に立てば、我々は空気、食物、土壌といった環境を汚染し続け、それらの重荷は力の乱用によって被支配的立場を強いられている人々にのしかかっているという。今や、個人のレベルを超えた社会全体としての「問題」が個人の「問題」に深く関わっており、このような認識なしに現代の「問題」は理解できないと考えるべきである。

第2には、ハビタット(habitat)とニッチ(niche)に関する概念である。ある生態学者は、ハビタットをその有機体の住所(address)、ニッチを職業(profession)と表現している[28]。つまり、ハビタットとは有機体の存在するあらゆる場所を指し、ニッチはその有機体がその生態系の中で占める役割を指す。これらを人の社会に置き換えれば、ハビタットは人の存在する全ての場であり、ニッチはその「人」の社会（時にはコミュニティかもしれないし、グループかもしれない）における位置づけといえる。ハビタットは「居住空間」、ニッチは「適所」とも訳される。ジャーメインがこれらの概念を新たに加えたのは、特にコミュニティにおけるソーシャルワーク実践にとって有効であると考えたからである。生態学では中立的(neutral)と考えられているハビタット、ニッチもライフモデルにおいては「人」に対して否定的な影響も与えうる重要な概念として採り入れられた。

第3には、ライフコース(life-course)に関する概念である。ジャーメインは「ライフコース」をこの第2版に

おいて最も発展した概念であると述べている。ライフコースは従来の伝統的な「ライフサイクル」の概念に取って代わるものとされる。ライフステージという概念を用いて人のたどる人生を固定された、普遍的なものとしてみなすライフサイクルに対し、ライフコースは人それぞれがたどる独自の人生と、個人個人がそれぞれの環境のなかで経験する様々な生活体験を重視しており、「問題」を「問題」たらしめる、stressor-stress-copingの一連の枠組みにも関わってくる。またライフコースは、異なったレベル、角度から捉えた3つの「時間」のなかに位置づけられている。「歴史的時間(historical time)」「個人的時間(individual time)」「社会的時間(social time)」である。歴史的時間、つまり出生コーホートに影響を与えるような社会的背景という大きな流れの中にその「人」が主体となって体験する個人的時間や家族、社会として経験する社会的時間が存在している。現時点に表れている事象は「時間」という概念をもって捉えるならば部分的に切りとって考えられるものではない。当然のことながら「人－環境」の交互作用においても「時間」は一方向へ流れており、「問題」の個別性を考えるに当たって時間という概念は有効なものであると考えられる。

表4　ライフモデルの新たな概念

威圧的の力 Coercive power	個人的、文化的特徴にもとづいて支配的集団が他の集団を力によって圧倒すること。
私的搾取の力 Exploitative power	世界中で技術公害を生み出し、人々や地域社会、とりわけ貧困者とその地域の健康と安寧を害する支配的な集団による力の乱用。
居住環境 Habitat	有機体が存在する場所。比喩的に用いられ、個人や集団のすべての物理的及び社会的状況を指す。
適所 Niche	生物学的地域における種の占めている位置。比喩的に用いられ、地域社会において個人や集団によって占められている社会的位置を指す。
ライフコース Life course	人間がそれぞれ異なった環境や文化の中で、そして受胎と出産から老いるまでの異なった生活経験の中でたどる、独自の予期できない発達の過程。
歴史的時間 Historical time	社会変化の歴史的文脈と、その文脈が異なった時代の出生コーホート（同時代出生集団）に与える影響。
個人的時間 Individual time	与えられた歴史的文脈、（個人の生活歴を典型例とする）特定の文化の中で、人それぞれが体験する個人の生活経験及びそれらの意味と結果。
社会的時間 Social time	家族や集団、地域社会において予期される、あるいは予期できない変化、トラウマとなる出来事、その他の生活問題。その結果として起こる肯定的な集合体の変質や起こりうる破滅的な混乱。

出所：Carel B. Germain and Alex Gitterman, *The Life Model of Social Work Practice*(2nd ed.), Columbia University Press, 1996, p. 23.（訳は筆者による）

4．エコロジカル・パースペクティブと「状況の中の人」の概念

ライフモデルを支える主要概念について整理と考察を述べてきたが、これらの概念は、「人」の生活や状況（環境）との関係について明快に説明しうる視座を提供する。

ソーシャルワークは「状況の中の人」という概念をもち、歴史的には人と環境の両者に関心を向けながらも、その概念的架け橋がなかったために人か環境かという二者択一的な焦点づけしかできずにいた[29]。そしてその焦点づけは、ある時は「人」へ、ある時には「環境」へと両者の間を行き来していた。この行き来の背景には、19世紀以降の科学至上主義という潮流の影響や[30]、1960年代以降の「問題の多様化」に応えようとする努力があったと考えられるが、その根底には「状況の中の人」という概念のもつ曖昧さが常に存在していたと思われる。つまり、ソーシャルワークは「状況の中の人」という視点の重要性を認識していたものの、それを具体的に説明できずにいたのである。

ライフモデルと「状況の中の人」の関係は、先に引用したように、有機体と環境の相互依存を強調する生態学は「状況の中の人」という概念に歴史的関わりを持ち続けてきたソーシャルワークのメタファーとなるというジャーメインの言葉に端的に表れている。つまり、ライフモデルにおける生態学の概念の援用は「状況の中の人」の曖昧さを払拭するものであった。

そこで、ライフモデルの主要概念を通して「状況の中の人」について再度検討するならば、「個人と環境との力動的一体化」と「主体的存在としての本人」の2点の特質が明らかとなる。

1）個人と環境との力動的一体化

第1の特質は、「人と環境は切り離せない」という対象把握における前提である。これは個人と環境との力動的一体化といえる。ライフモデルにおいて、人と環境は生態系と同様、交互作用というお互いに影響を与え続ける関係性で結ばれており、したがって生活者としての人は自身を取りまく交互作用を通して適応し続ける存在といえる。そして交互作用という概念を中心に据えたとき、「問題」は単なる二者間の直線的因果関係で説明されるものでなく、多くの交互作用が絡み合っており、その原因は人か環境かという二者択一的な視点では解明できないことが明らかになる。これは、ソーシャルワークに人と環境のどちらか一方だけでは援助として不十分であるという問い直しを迫るものである。エコロジカル・パースペクティブに基づいた、人と環境の「交互作用」という用語を用いて人と環境を結びつける「中の(in)」という概念を説明したことは、これまでの「人と環境は切り離せない」という前提を理論的に強固なものにした。

2）主体的存在としての本人

第2の特質は、「状況の中の人」の主体はあくまでも「人」であるという特質である。ライフモデルでは問題をlife stressor-stress-copingという一連の枠組みで捉えているが、ここではその人自身による評価が重要な意味を持つ。今おこっていることがストレス源(stressor)なのか試練(challenge)なのかの評価は、その人個人によって異なり、その差異はその人の内的活動や、身体的状況、環境、過去の経験、その人自身がどの程度の問題を深刻なものとみなすかということ、資源を活用したり、問題をさける力量などが関わっているという[31]。

また、ライフモデルは自己概念を重要視する。ジャーメインは関係性(relatedness)、対処能力(competence)、自己評価(self-esteem)、自己指南(self-direction)の4つを人の基本的属性とみなしているが、これらが高められるのはその人自身の経験によると考えている[32]。さらに、第2版ではライフコースに基づく概念をもっとも発展させた。これは人それぞれの人種、文化、民族、性別、社会的地位など、多様性を考慮するものである。

このようにライフモデルの概念には、人それぞれの個別性を明らかにし、またその個別性の認識の必要性を示唆する視点がちりばめられている。生態学的視座に立てば、人が生きるということは必然的にその人の環境との間で交互作用を絶えず行うことである。ジャーメインによる生態学についての言葉を借りるならば、進化的で適応的な存在として人間を捉える[33]ということである。つまり、人は一生涯、環境との良好な適合に向かって努力する存在であり、かつ物事に対する意思決定や選択をし(＝適応的存在)、過去の経験の記憶や将来の可能性を予測し、それによって導かれた行為を行う積極的、目標指向的、目的的な存在(＝進化的存在)なのである[34]。

このような視点は、その人こそが状況の主体であることを十分に説明している。つまり、その状況の主体は他のだれでもなくその人自身であり、他の人が取って代わることはできない。したがって、他者が本人からみえる状況を同じようにみることは容易なことではないのである。

この「主体的存在としての本人」の視点は、援助関係において極めて重要な意味を持つと思われる。なぜなら、主体は本人でしかないということは、その人自身しか問題解決の主体にはなり得ないという確信と、その本人の状況にどれだけ近づけるかという課題を援助者に与えるからである。この認識は援助観を強く支え、援助者の役割を言及する上で重要な基盤となる。

5．おわりに　ーソーシャルワーク実践における課題

エコロジカル・パースペクティブからみた「状況の中の人」の特質とは、「個人と環境との力動的一体化」と「主体的存在としての本人」であった。人と環境とは切り離せないものであり、かつ状況下にある主体はその本人でしかあり得ない。ソーシャルワークにおけるこうした視点は、従来から指摘されてきたことではあるが、エコロジカル・パースペクティブから「状況の中の人」を精緻に分析した結果、この点が浮き彫りになったことは、われわれに力強い示唆を与えてくれる。

介護保険制度をはじめとする新しい制度下にあって、ソーシャルワークの専門性が根底から問われている。要援護者をどのように捉えるのか。本人のニーズをどのように把握するのか。さらには本人からみた「生活」をどのように知るのか。保健・医療・福祉の連携が強調される中で、そこに介在するソーシャルワーカーの役割は極めて大きい。

ソーシャルワークに深く馴染んだ「状況の中の人」の概念は、ソーシャルワーク固有の機能を明らかにする切り口となるはずである。

注

1）武田建・荒川義子編著『臨床ケースワークークライエント援助の理論と方法－』pp.5-6,1986年。

2）メアリー・E・リッチモンド著／小松源助訳『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』p.57,1991年。

3）前掲書,p.79。

4）前掲書,p.89。

5）G.ハミルトン著／四宮恭二監修、三浦賜郎訳『ケースワークの理論と実際（上巻)』1960年,p.2。

6）G.ハミルトン著／四宮恭二監修、仲村優一訳『ケースワークの理論と実際（下巻)』1964年,p.1。

7）ハミルトン著／三浦訳、前掲書、原著者序,p.3。

8）ハミルトン著／三浦訳、前掲書、原著者序,p.2。

9）パールマン著／松本武子訳『ソーシャル・ケースワーク』1958年、p.4。

10）パールマン著、前掲書、1958年、p.5。

11）『臨床ケースワーク』p.20。

12）フローレンス・ホリス著／黒川昭登、本出祐之、森野郁子訳『ケースワーク－社会心理療法』1966年,p.8。

13）同上書,p.8。

14）同上書,p.10。

15) 岡本民夫「ケースワーク理論の動向（II)」『評論・社会科学』第32号,1987年,p.6。
16) 同上書,1987年,p.6。
17) Carel B.Germain and Alex Gitterman, *The Life Model of Social Work Practice*(1st ed.),Columbia University Press,1980.
18) Carel B.Germain and Alex Gitterman, *The Life Model of Social Work Practice*(2nd ed.),Columbia University Press,1996.
19) *ibid.*,p.5.
20) 佐藤豊道「社会福祉実践の生活モデル－生態学的アプローチ－」『社会福祉研究』第36号,1985年。
21) 平塚良子「社会福祉における生態学的アプローチに関する考察(1)－Life Model実践例を通して－」『キリスト教保育専門学院年報』第5号,1985年。
22) 同上論文。
23) 平塚良子「社会福祉におけるクライエント認識に関する一考察－転換期における『価値』からの視点－」『社会福祉学』第27-2号,日本社会福祉学会、1986年。
24) 平塚良子「ライフモデルアプローチのパラダイム論考」『キリスト教保育専門学院年報』第9号,1989年。
25) Germain and Gitterman, *ibid.*,Preface.
26) 平塚,前掲論文「ライフモデルアプローチのパラダイム論考」。
27) Germain and Gitterman, *ibid.*,p.19.
28) Germain and Gitterman, *ibid.*,p.20.
39) *Encyclopedia of social work*,19th edition,1995.
30) 佐藤,前掲論文,1985年。
31) Germain and Gitterman, *ibid.*,p.12.
32) Germain and Gitterman, *ibid.*,p.14.
33) Germain and Gitterman, *ibid.*,p.6.
34) 平塚,前掲論文「ライフモデルアプローチのパラダイム論考」。

Summary

The purpose of this study is to discuss the original perspective in social work practice. For that purpose, we attempt to undearstand "person in the situation" ,which has continued to be an important concept in social work theory, more deeply in ecological perspective. Also this attempt will lead to understanding the originality of social work itself.

First,we deal with "person in the situation" from the several views given by some historic researchers. Secondly,we study on the life model theory developed by Carel B.Germain and Alex Gitterman from the framework of the four key-concepts.

Third,we present two conclusions for social work practice.